

2019年3月1日～10日付

## ホツマツタエ講座

ホツマツタエ研究家 吉田六雄

### ホツマツタエが奉納された経緯

景行天皇のオミ(臣)であったオオタタネコは、「ホツマツタエ」を編纂し、クニナヅ(伊勢神宮の神臣のオオカシマのこと)に示された。オオタタネコ、クニナヅの二人は、お互い「ホツマツタエ」と「ミカサフミ」を持参して、奈良の三輪のオオモノヌシに示されて、二つの書について語られたと云う。そして、「ホツマツタエ」を新たに書き写して、オオタタネコ、クニナヅの二家よりスメラギ(天皇)に献上された。

この二つの典(フミ)について、昔、オオモノヌシが申されたことは、「昔より代々、典を受け取り、また新たに書き写して、後の世代の典として、滋賀県の淡宮に入れ置いた」典である。この典を読み取る人の思いはまちまちであるが、そのため、予め、皆で議論を尽くすが、百回千回も試みたが、未だ納得ができないと云う。この「ホツマツタエ」と「ミカサフミ」は、とても奥が深く、恐らく、カミ(神)の道に入って学ばないと理解できないくらい難しい典のようである。

そして、新たに写本が開始された「ホツマツタエ」は、古墳時代の前期、西暦262年秋、景行五十五年、アスス八百四十三穂秋に完了し、スエトシ(オオタタネコ)より「ホツマツタエお述べ」の法呈文を添えて、スメラギ(天皇)に献上されるに至った。

### ホツマツタエ 序 奉呈文 解説文

#### 奉呈文—1(1～3行)【本文】

四 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒	ホツマツタエオノブ
◎ 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒	アメツチノ ヒラケシトキニ
△ 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒 卒	フタカミノ ホコニヲサム

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

天地の開けし(天地開闢)時に、創成神である初代クニトコタチ(国常立)の御世においては、まだ、矛が開発されてなく、「矛なきゆえ(故)は素直にて、ノリ(法)お守れば矛いらず」の世だった。時代が降って、六代目のオモタルのアマカミ(天神)の頃になると、荒廃した御世になり、「民利きすぐれ物奪ふ、これに斧もて斬り治む」世になっていた。そして、七代目のイサナギが天日嗣された両神(イサナギ、イザナミ)の御世では、「瓊(ヨシテ)の道」を説かれ、ノリ(法)を厳守され、それでも従わない者には「矛(両刃の剣)」に権威を持って統治され、国を治む世へと変化して行った。

### 奉呈文—1(4行)~2(3行)【本文】

𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	タミマシテ	アマテルカミノ
𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	ミカガミオ	タシテミグサノ
𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	ミタカラオ	サヅクミマコノ
𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	トミタミモ	ミヤスケレバヤ

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

そして、両神の御威光が津々浦々まで行き渡るようになり、日を増す毎に民も増して、アワ、イネなど農業も盛んになって来た。また、皇孫のニニキネの御世になると、筑波の麓の良き野を得られて開墾が進み、また、ニニキネも新治宮を建てられて国を治められた。そのニニキネの功績を高く評価された大御神は、自らのアマテル・カミ(神)の御書(瓊)と御剣(矛)に御鏡お足して、三種の御宝お、ニニキネに授づく(けられたのでした)。この三種の御宝を授かることは、天日嗣の印であり、皇孫、臣、民も一様に安らかなり、身易ければや。

### 奉呈文—2(4行)~4(1行)【本文】

𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	トミガオヤ	シイルイサメノ
𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	オソレミニ	カクレスミユク
𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	スエツミオ	イマメサルレハ
𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	ソノメグミ	アメニカエリノ
𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	モフデモノ	ホツマツタエノ
𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺	ヨソアヤオ	アマタテマツリ

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

オオタタネコの臣が親のオオモノヌシのオミケヌシ(大御気命)は、「九代の開化天皇がイキシコ姫を中宮(正后)に立てた」のを聞き付けられました。そして、オミケヌシは天皇の前に出て、『イカ(キ)シコ姫は、先代孝元天皇の内待妃です。この姫を君が召されれば、「昔、白人コクミが母犯す」罪と同罪の汚名を被ることになります。』と強いる諫めの言葉を申し上げた。だが、開化天皇が聞き入れる耳を持たなかった。そのため、オミケヌシは天皇への諫言を畏れ身に和泉国の陶邑に隠れ棲みゆく。

時は、次の崇神天皇の御世に移っておりました。崇神天皇は御祖より授かった三種神宝を神に捧げて、常に祭って来ましたが、キ(君・崇神天皇の願い)は遠からず。そして、その原因は、先代孝元天皇の内待妃を召したため、白人コクミと同罪の汚名を被ることになり、君の心は安らげなかったと云う。そのため、君はイシコリドメの孫に鏡を造らせ、アメヒト神の孫に剣を新たに造らせて天照らし、更に、国常立神より伝わるヲシテ(文書)の三種を合わせて、天つ日嗣の神宝を寄り処とされました。

だが、事態は好転せず、翌年には疫病が発生し民も半分になり、また、翌々年には残っていた民も地方に散った。崇神天皇は大國魂の神やアマテル神の宮を新たに造り祈りを捧げられたが、それでも汚穢は鎮まらず。崇神天皇は丹後半島の宮津の朝日の原に御幸され八百万神を招いて祈られた所、モモツ姫の託宣によってオオモノヌシの神が夢に現れるや、「オオモノヌシの裔孫の**スエツミ**お大三輪神の斎主」とすべしとの神託を得られ**今召さるれば**、民にあまねく触れては神を崇め、神名の典を積まれた。

更に、神部氏をして八百万神を祀られた。このことが国常立神に通じたのか、疫病も平けて癒え、また、稲も稔り民も豊かになって来ました。そして、天朝に召されるとは思っていなかったオオタタネコは、**その恵みを天に還りの詣出物として捉えて**、アマキミ(天君)の代々の世にまで伝えようと、アスス暦の八百四十三年(西暦262年)に、「**ホツマツタエ**」の**四十アヤ(綾)**お畏れ身ながら**編み奉り**されました。

#### 奉呈文—4(2~4行)~7(2行)【本文】

水元田	△田	▽開単	キミガヨノ	スエノタメシト
田△開単	田△開単	田△開単	ナランカト	オソレミナガラ
卒田△開単	田△開単	田△開単	ツホメオク	コレミンヒトハ
開△開単	田△開単	田△開単	シワカミノ	ココロホツマト
田△開単	田△開単	田△開単	ナルトキハ	ハナサクミヨノ
田△開単	田△開単	田△開単	ハルヤキヌラン	
凡△開単	田△開単	田△開単	イソノワノ	マサコハヨミテ
卒△開単	田△開単	田△開単	ツクルトモ	ホツマノミチハ
凡△開単	田△開単	田△開単	イクヨツキセジ	ミワノトミ
△△開単	田△開単	田△開単	ヲヲタタネコガ	ササゲント
△△開単	田△開単	田△開単	フモミソヨトシツツシミテヲス	
△△開単	田△開単	田△開単	ヲリツケノ	ウハノシルシト
田△開単	田△開単	田△開単	ハナヲシオ	ソエテササグル

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

そして、オオタタネコが「ホツマツタエ」を編纂されたご主旨は、「**君(スメラギ)が代の末代までの例(ためし・先例)**」**とならんか**と願われて、**畏れ身ながら**スメラギ(天皇)に変わり、オオタタネコが何枚に渡りも書き溜めたヲシテを、小さく折本に**ツボめ置く**ことをされた。その甲斐があって、代々の皇子らは末代まで、「ホツマツタエ」を学ばれた。

そして、**これホツマツタエを見ん(た)人は**、磯輪上の心ホヅマを習得となる時は、大輪の花が咲くように、スメラギ(天皇)の御代の**春や来ぬらん**(春が来るに違いない)と語られ、この願いは、**磯の輪(浜)**

の真砂は、大きな岩が潰れて小石、小さな砂になるまで数えよみて作ることもできても、我がホツマの道(真の道理)の追求は、幾代(何代)に渡っても尽きせじ(尽きることはないでしょう。)

そして、三輪のオミ(臣)のヲヲタタネコが捧げんと、二百三十四の歳にして、謹みて押す。更に、ホツマツタエを小さく折本するための折り付け(折り始めとして)のウハ(表)の印として、花押しお添えてタリヒコのスメラギ(天皇)に捧ぐる。

### 奉呈文—7(2行)~8(4行)【本文】

𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

#### 言述への歌

久方のことであるが、君が臣、民のことをお知りになる行為を天が下知ると云うが、我が君のアマテル神は、臣、民のことを良く知っておられることは世々に伝わっている。そのためにアマテル神は、八人のサカシカ(勅使)を任命され、頭に被る冠は、アマテル神の勅使人(サオンカド)とわかるように作らせて、さおしか(勅使)が全国を周って、各地の情報を八つの御耳に聞いたものを、コエ国の伊雑大内の宮に居られるアマテル神に召される(なさる、お知らせした)。このように、アマテル神は伊雑大内の宮に居ても、「民の教養は 伊勢の道」と気に掛けられておられました。

### 奉呈文—9(1~4行)【本文】

𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺
𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺	𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺𠩺

### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

このようにして、アマテル神の朝廷の政りも遍く通り(広く知れ渡り)、アマカミ(天神)のご加護を照らす(照らされた)。その甲斐があつて、大御田(アマカミ(天神))の一族も意も安く(心も穏やかに)過ごされた。このことから、アマテル神のお住まいを安国宮と讃えられます。

### 奉呈文—9(4行)~10(2行)【本文】

みみ央単开匹兼 ヤヨロシヘテ  
田去△并田 凡母分田并母并 コエウチノ イサワノミヤニ  
分分开分分 ラワシマス

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

ワカヒト(アマテル神)が生まれられる頃の2300年(紀元前300年)前までは、ハラミ山の噴火が頻繁に起こっておりました。そんな中、ワカヒトは、スス暦の「二十一鈴百二十五三十一穂」(紀元前330年1月1日)に生まれられた。その後、日高見の義理父であるトヨケの元に天成る道(帝王学)を学びに行かれた。約10年後の紀元前320年頃です。天成る道の学びも一段落を迎えた頃になりますと、トヨケの元を離れて、日高見よりハラの新宮に遷られることになった。

ワカヒトが日高見より遷られ、太陽暦換算おいての約4年後(スス暦にて約二万三千穂が過ぎた)の紀元前316年(二十二鈴五百五枝初)、スス暦で八万年(約14年)経て、ワカヒトの御代も豊に治ってきた頃、「天の真名井」よりトヨケの訃報が伝えられた。真名井でトヨケの神上がりを見届けたワカヒトは、ハラの新宮に帰られるや、ハラミ(富士)山南麓にあったハラの新宮(都)を、ハラミ山の噴火の災難より安全な所に退避するため、思兼(命)に遷都の計画を相談された。その甲斐があつてハラの新宮は、コエ(関西、中部の一部)内のアマカミ(天神)にゆかり深い伊勢志摩に遷され、新たに伊雑の宮と命名されて、アマテル神は晩年までこの地に御座します。

#### (ご参考)

ハラミ山の噴火とハラの新宮の遷都については、古代史の一面には現れないが、2014年3月に更新された新富士山地質図には、紀元前300年まで富士山が噴火していたことが記述されております。一方、ホツマツタエのハラミ山の噴火時期を考察すると紀元前430年~435年前頃(吉田説)に計算され、前述の伊雑の宮とハラミの噴火は密接な関係があつたことが容易に推測される。(吉田説)

### 奉呈文—10(2行)~10(4行)【本文】

并田分开田并の ミコオシホミハ  
凡分①并田 分①田田△并兼 ヒタカミノ タカノコウニテ  
△并分分分 クニヲサム

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

皇子オシホミは、紀元前289年(二十五鈴百三十枝の年サナト)の春の初日に、世の天日嗣を伊勢のアマテル神より譲り受けられて、後に日高見の国の多賀の国府にて国を治む(治められた)。

### 奉呈文—10(4行)~11(2行)【本文】

マゴホノアカリ  
カグヤマノ アスカノミヤニ  
ヲワシマス

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

天照らすアマカミ(天神)は、オシヒトである。時は、紀元前280年(二十六鈴十六枝四十一穂・年キアエ)の弥生のことである。オシヒトのアマカミ(天神)は、天孫のクシタマ **ホノアカリ**(イミナ:テルヒコ)皇子を、空見つヤマトの飛鳥宮に降ろさんと自ら告文お書かれて、カクヤマ勅使を通じて伊勢のアマテル神に奉られたのであった。そして、アマテル神より勅書が下りたホノアカリは、**香具山の飛鳥の宮**にて政務をされて**御座します**。

そんなオシヒトのアマカミ(天神)も、老いられたある日のことであった。皇子の二人を前にオシヒトのアマカミ(天神)が申されるには、「今日より兄のテルヒコの名は、ヤマトの飛鳥親君として国を治めてくれ。」「弟のキヨヒトはハラ親君として国を治めてくれ。」「これから二人で共に睦みて、のちにエト神と云われるその日まで、その民を慈しみ守ってほしい」と言葉を残されるのであった。

### 奉呈文—11(2行)~11(4行)【本文】

オトニニギネハ  
ニイタナス ニハリノミヤノ  
ソヤヨロニ ニイタミフエテ

#### 解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

紀元前280年(二十六鈴十七枝二十三穂弥生初日)に、キヨヒト皇子は、第二代オオモノヌシのクシヒコに勅りをされた。「クシヒコの親(クシキネ)の国である「出雲八重垣」(注)は、法を定めて国を治めた。その元の法は先神(ソサノオ)が、ハタレ征伐の功し(報賞)により、クシヒコにも「事立てん(改まったことを企画する)」を許されて、四方(全国)を巡っている内に、現在の関東平野のニハリ(新治)の地を見聞されて、「良き野お得たり ここに居て 田お開かん」と、キヨヒト(弟ニニキネ)皇子に報告された。  
(注)出雲:ハタレ征伐により、氷川神のヲシテ、八重垣旗を賜った時に、大御神より赦された国。

この報告を受けられた**弟ニニキネ**は、開拓を進めるに当たって「オモイカネが編み出した建築法」を申されて、「先ず新治宮を建てるために、フトマニを用いて宮造り法を定めてくれ」と、クシヒコに勅りされるのであった。そして、ニニキネよる筑波山麓の関東平野での開拓が進み**新しい田成す**。この間に、**新治の宮での政りが十八万年(西暦換算約 20.4 年)にも及び新たな民も増えてきた**。

奉呈文—12(1行)~13(1行)【本文】

田 𠩺 𠩺 ① 水	① 𠩺 𠩺 田 𠩺 𠩺 𠩺	ナモタカキ	ハラミノミヤニ
𠩺 𠩺 田 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 ① 𠩺	タミヲタシ	ツイニシワカミ
田 𠩺 𠩺 田 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 田	ホツマナル	ムソヨロトシノ
田 田 𠩺 𠩺 𠩺	𠩺 ① 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	ヨオシリテ	イカツチワクル
𠩺 𠩺 田 ① 𠩺		イツノカミ	

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

21鈴(紀元前330年)に、ウホヒルギ(アマテル神)がハラミの宮で生まれられていた。その宮も30鈴(紀元前255年)頃には、**名も高きハラミの宮**に云われていた。そのハラミの宮、新治の宮を第二ニキネは建てられ、田水のためにハラミ山より水を引かれて三十万年(約25~26年)に渡り**民お治して**、三十鈴の暦なす頃、**遂に磯輪上のホツマ成る**。更に、三十万年(約25~26年)に渡り世を治められて**六十万年(約50~51年)の世を知りて**、**雷を別(分)くる稜威の神**と称えられていた。

奉呈文—13(1行)~16(2行)【本文】

	𠩺 水 𠩺 𠩺 ① 𠩺		トキニオンカミ
田 𠩺 𠩺 田 ①	𠩺 𠩺 𠩺 水 𠩺 田	ノタマフハ	イマニニキネノ
𠩺 水 𠩺 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 田 𠩺 𠩺 田	サキミタマ	クニトコタチノ
𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	① 𠩺 ① 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	ワザミタマ	アラハルイツト
① ① 田 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 ① 𠩺 𠩺 田	カガナエテ	ワケイカツチノ
① 𠩺 水 𠩺 𠩺	田 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 ① 𠩺	アマキミト	ナツケタマハル
田 田 ① 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 田	ヨノハシメ	イマスヘラギノ
① 𠩺 水 𠩺 ①	𠩺 田 𠩺 𠩺 水 𠩺 田	アマキミハ	ミナニニキネノ
𠩺 𠩺 𠩺 田 𠩺	𠩺 田 𠩺 田 𠩺 田 田	イツニヨル	ミコマコヒコノ
𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	① 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	スエマデモ	アマテラシマス
𠩺 𠩺 ① 𠩺	𠩺 𠩺 𠩺 田 𠩺 田	オランカミ	モモナソヨロノ
𠩺 𠩺 田 𠩺 𠩺	𠩺 𠩺 田 𠩺 田 ① 𠩺	トシオヘテ	モトノヒノワニ
① 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺	① 田 𠩺 𠩺 田 田	カエマシテ	アオヒトクサオ
𠩺 𠩺 𠩺 𠩺 𠩺		テラシマス	

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

ニニキネ天君は、紀元前248年~紀元前246年の頃に、82~84歳になられたアマテル神の大神より、別雷の天君と名を賜われた。その時に、アマテル神の**大神は宣ふは**、次のことをお仰になられた。今『**ニニキネ(キヨヒト)天君**は、これまで全国を開拓して稲作りを普及させ、民を豊かにされた功績は大である。今では、民より幸福を与える神の**靈魂(幸御魂)**と呼ばれ、また**国常立**の稲作りの功績を



奉呈文—18(1行)~20(4行)【本文】

① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	カレニヒツオ	故に一つお
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	アゲシルス	挙げ記す
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	カモワレテ	鴨われて
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ナギサニテ	渚にて
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	オヨガセバ	泳がせば
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	チカラエテ	力得て
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	イソニツク	磯に着く
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	フネワレテ	船われて
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	チカラエテ	力得て
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	テニオハゾ	てにおはぞ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	シルシフミ	記し書
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	コレニシレ	これに知れ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	フソムノアヤニ	二十六のアヤに
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	トヨタマヒメモ	トヨタマ姫も
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	タケキココロニ	たけき心に
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	タツヤミツチノ	龍や蛟の
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ツツガモナミノ	恙もなみの
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	コレオヨソニテ	これお他に
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	タツミツチノ	龍と蛟の
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	コレアヤマレル	これ誤れる
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	スベテナナヤノ	すべて七家の
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	コトナリガチハ	異りがち
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎		これに知れ

解説文 (赤文字は、原文の現在訳です。)

故に、真実と決めきれない理由の一つお例に挙げ記すと、ホツマツタエの二十六のアヤに次の文がある。その文は「鴨われて トヨタマ姫も 渚にて たけき心に 泳がせば 龍や蛟の 力得て 恙もなみの 磯に着く」である。だが、これお他の家々のヲシテ文にては、「船われて 龍と蛟の 力得て」となっており、「鴨われて」が「船われて」に変化し、「トヨタマ姫も 渚にて たけき心に 泳がせば」の文が抜けて、「龍と蛟の 力得て」と続く。また、その後の「恙もなみの 磯に着く」の文が抜けている。

これ誤れることであり、文章の基本であるてにおはだぞ。このようにすべて七家の記し書に異りがちがあることは、これに知らなければならない。

奉呈文—20(4行)~22(3行)【本文】

① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ワガカミノヲス
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ミカサフミ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ワリウルリ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ココロナリ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ナルフミハ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	オモフユエ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ソエキレテ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	スエニヲシテゾ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ホツマツタエト
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	アワスコクノ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ヨヨノヲキテト
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	ホツマツタエト
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	フカキココロオ
① 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎 𠄎	アゲタテマツル

**解説文** (赤文字は、原文の現在訳です。)

我が神(アマノコヤネ)の推す、アマカミ(天神)の流れを汲む「ミカサフミ」とタカミムスビの流れを汲む「ホツマツタエ」との両書は、二つに割った瓜を合わす如く、二つは同じ心で編纂されているなり。

この両書は代々にも続くように、子孫の守るべき掟と定めており、その定めのもとに成る書はホツマツタエと思ふ故、そのホツマツタエの編纂の主旨は、天なる道である。時に歴代の天神、天君、スメラギは、臣、民を意易くするための深き心お持っておられ、その深き心お添えて入れて、ホツマツタエを挙げ奉られる。このようにホツマツタエが代々引き継がれる末には、ヲシテによる所が大きいぞ。

**奉呈文—22(4行)~23【本文】**

① 田 田 丹 去 △ 甲	ハナノソエウタ
① ① 参 田 ☆ ① 小 田 爪 単 开 小	カカンナス ハルノヒトシク
参 小 丹 水 策 凡 丹 田 ④ ④ ④ ④	メクリキテ イソノマサゴハ
凡 夕 単 田 小 由 由 田 参 策 参 田	イワトナル ヨヨノンテンノ
四 卒 ④ 元 ① ①	ホツマ フミカナ

**解説文** (赤文字は、原文の現在訳です。)

**花の添糸歌**

カカン(神明・天照大神のこと)の世も成す、天神の臣、民も安らぐ御世になって来た。その頃、天の原に訪れる春の気候変動も少なくなり、毎年、渡り同じ月に春がひとしく巡り来るようになっていた。このような長閑な天の原においても、時は移り、磯の真砂は岩となる。この代々ノンテンの世を、何代も渡って守ることができる書は、ホツマ書以外にはないと思われる。

**奉呈文—24(1~4行)【本文】**

④ 水 余 水 田 凡 开 奥 田 元 由 丹	マキムキノ ヒシロノミヨニ
元 ① ④ 単 元 凡 夕 田 ① 参 ④ 元	ミカサトミ イセノカンヲミ
④ ④ ① 开 ④ ④ ④ 再 丹 ④ 単 开	ヲヲカシマ フモヨソナトシ
④ ④ ④ ④ ④ ④ 开 ④ 丹 ④ 卒	ササクハナヲシ クニナツ

**解説文** (赤文字は、原文の現在訳です。)

奈良・纏向の日代(景行天皇)の御世のことになる。三笠臣、伊勢の神臣であった大鹿島が、二百四十七歳の時に、オオタタネコが編纂したホツマツタエに奉呈文を添えてアマカミ(天神)に捧ぐ。

花押 クニナツ(大鹿島のイミナ)

(序 完了)

